

録取書

鎮海防備隊

海軍兵曹長 平田三郎

当三十二年

右者昭和二十一年十月二十五日鎮海防備隊機雷
爆発事故査問會ニ對シ任意左ノ通陳
述ヲ爲シタリ

一私ノ所屬等級氏名年令ハ只今申上ゲミシタ如クテ間違アリマセヌ

一私ハ才ノ十駆潜特務艇乗組ニ鎮海整備府命令ニ依ル掃海作

業ニ從事シテ居リマシタ

一才ノ十駆潜特務艇ノ任務ニ就キ申上ケマス

カ

<p>八十駆潜特務艇九三三三号、駆特務艇掃海隊トシテ鎮海湾(加徳島 東頭末水路)ノ掃海ニ任セラレテ居リマシタ</p>	<p>掃海ハ對艦式ニ行ツテ居リマシタガ丁度當日ハ本艇ハ非番艇ニテ</p>	<p>ボンド内浮標ニ籍艦繫留後部陸上ノピットニ繫留シ艇内整</p>	<p>備作業ニ従事シテ居リマシタ</p>	<p>一三三三ノ頃オ三ノ号駆潜特務艇一曳十五号十六号掃海特務艇</p>	<p>ハ相次イテ入港シマシタ三ノ号駆特務艇陸上副ヒ横付け一曳ハ浮標ニ</p>	<p>繫留シテ作業ニカリマシタ</p>	<p>一十六号掃海特務艇ハ入港ニ先立ツテ本艇ニ対シ貴艇右舷横付けトノ</p>	<p>信号ヲ送ツテカリマシタノテ本艇ハソノ用意ニカリマシタ</p>	<p>從來他船艇入港スルトキハ附近繫留中ノ船艇ヨリ作業員ヲ出シ陸上</p>
--	--------------------------------------	-----------------------------------	----------------------	-------------------------------------	--	---------------------	--	-----------------------------------	---------------------------------------

海
軍

22

字挿入

「ビット」ニ舳ヲ取ルヤウニナツテ居リマシタ

「当時岩壁ニハ大発火カ火薬ヲ陸揚中デアリマシタガオ十六子掃海特務艇が本艇ノ横付ニナルト云フノデ大発火陸揚作業ヲ中止シ西側ニ置ヲ変更致シオ十六子掃海特務艇ハ後進ニテ本艇ニ横付ケスツテキマシタ

本艇ヨリオ十六子掃海特務艇ノ舳取リ作業ニ深谷上水原口上水ノニ名ガ陸ニ上ツテ待ツテ居リマシタ舳ヲ取ツテ「ビット」ニ移シ換ヘテ深谷上水ノ足先ヨリ「パット」ニ発火シタヤウデスガ此ノ真ハ判然ト致シマセマ
「深谷上水ハ発火ト同時ニ火傷ヲ負ヒ「ズボン」ヲ脱ギツク病室ノオニ走ツテ行キマシタ原口上水ハ海中ニ飛込ミマシタ

「発火ノ際直グ滑エルト思ヒ「ビット」ハ「パット」ニ飛火シテ積ミ上ゲテ有リマ

シタ火薬ノ積約之個位ト推定シテ引火シテ積上ト有リキレバ火薬
 左ノ端ヨリ遂次右ニ火ハ次ニ移クテ行キマシタレバ機雷ノ轟爆ヲ恐レ本
 艇ハボト外ニ出ヨウト思ヒマシタモノ、機械故障ニテ意ノ如クナラズハ
 駆特ノ方向ニ人カニテ移動退避シマシタ一曳十六号掃特ハ十駆特大
 発ハ直ニ出港シタヤウデアリマシタ

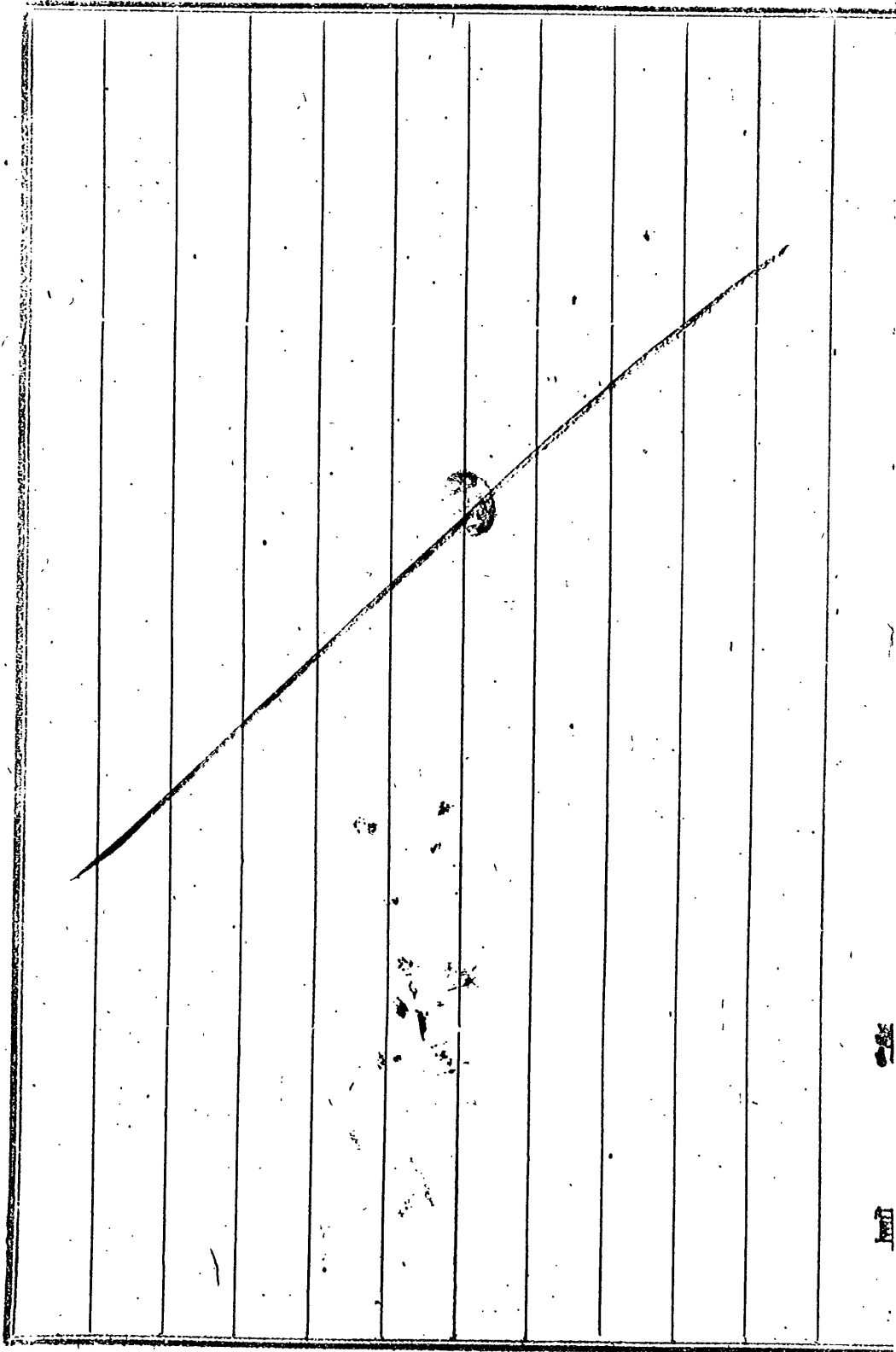
一火ハ遂次機雷ノ方向ニ移動シ約三秒以上燃焼シタカト思ハレ際防
 火隊馳ケケケ吐水口ニホースヲ取リツケ消火ニツトメタルモ水圧弱ク増
 ヲ危険ノ状態トナリマシタ

一四三頃迄ニ三三分間デ大爆発ヲ起シ(約三四)一瞬ニシテ陸上ハ一変シテ
 シマヒマシタ

一火薬取扱ハ特ニ嚴重ニ至シテ居リマシタカ作業者火薬ノ威力ヲ解シテ

78

イ
機雷爆雷等ハトラクトヨリドンノ陸上ニ
扱ヒスル如ク荒ク、破損セル箱及火薬ノ露出ヲミマシタノ銃積込ニ際
ハ銃乗組ノ准士官以上並督ヲシテ積込ニテ居リマシタガトラクトヤ大発
等ニテ運ビ居ル時ハ監督者ノ見掛ケセヌガシタ火薬ト機雷ヲ同一
場所ニ置クノ痛黨デナイト思ヒマス
一他ニハ申述ルコトハアリマセヌ



●

●

1362

アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp/>

24

右録取ス

昭和二十年

拾

月三日

鎮海防備隊機雷爆発事故査問會

書記海軍法務支隊長

委員海軍法務大尉

田村文彦

三原健三

海軍

1363

録取書

鎮海防備隊

海軍兵曹長

一色貫一

大正七年五月三十日生

右者 昭和二十年

十月二十三日

鎮海防備隊機雷

爆発事故 故査向會ニ對シ任意左ノ通陳

述ヲ爲シタリ

一私ノ所屬等級及氏名年令ハ只今申上ゲマシタ通りテ

アリマス。

一只今カラ鎮海整備府命令ニ依リマシテ海中ノ投棄作業ニ

従事シタコトヤ本月十五日ノ機雷爆発事故ニキ申上ゲマス

手加添

25

カ
半削除

一
半削除

ニ
半削除

一、私、乗組ニテツタ第五号掃海特務艇モ二前日申上ゲミタ
 作業ヲ携ツテ居リマシタ。十月十日ヨリ作業ニハカリマシタガ火
 薬作業ニ十月十五日頃カ(毎日)火薬ヲ塔載(積雷爆雷)
 ハハ式爆薬、小型積雷(捨ニ行キマシタ、艇トシテハ注意
 ヲ拂ヒ作業ニ從事セシメタ。爲何ノ事故モアリセ又(手)
 シタ。又放棄作業ハ命令通り順調ニ進ニテ居リマシタ
 一、事故當日、本艇ノ作業ノ状況ヲ申上ゲマス。十月十五日ハ〇〇
 頃出港塔載物件五号積雷(約十八個)ハハ式爆薬(粉
 薬箱入約二〇〇箱)小型積雷(約百個)ヲ塔載シ積雷及
 火薬類ニハヤシパスデ覆ヒ(作業者員ニ對シテハ火氣並ニ
 動搖、爲、危険ニ對シ充分ナル注意ヲ興ヘ規定地矣ニテ

放棄作業の事故ナク、四三の頃「ボンド」に収港致シマシタ。

一横付用意と同時に機械故障ニテ艇ハソノ行足ニテ前部ヲ

少シク觸裏シタレドモ船体ハ何等破損スル處ハアリマセン

デシタ機械故障約五分前頃カラ陸上ヨリ岸壁ニアツタ火薬

ヲ燃入初メマシタガ原因ハヨリ判リマセ又陸上作業員十名

許リ居リマシタガ火焰大ニルニシキ西内ノ方ヘト防備隊ノ

兵舎ノカニ分レテ逃ゲテ行キマシタ。

一本艇ガ岩壁ニシキアツタ火炎場約十五米乃至十八米位

ノ処デアリマシタノテ一艇ノ危険ヲサレル爲退避ニ言ウト思ヒマシ

タガ機械故障ボドウスル事モ出来ズニ三号艇持ノ陰ニシテ

退避シタ頃特雷ノ爆発ニマシタ比ノ直前迄米國側立會入

字挿入
字削除

字挿入

字挿入

二人乗艇シ居リマシタガ陸上モヤイテ取ツタ時退避シマシタ。
 一現場ニ火薬ト枝燭ト置イテアリ作業員カ約十名位居リ
 マシタガ火災ノ原因ハ分カズ初メ約十箱位積ンデアツタ
 火薬ニ火がツイタカト思フト直カ傍ニ次山積ンデアツタ
 火薬ニ火がツキマシタ
 一當時「バンド」内ニ一曳艇番艇第十六号掃海艇等が
 居リマシタガ火災発生ト同時ニ出港シテ行キマシタ。
 一火災ノ起ツタ際決死隊ヲ直ニ又シムシロテモ覆ヒカガセ
 海中ニ投棄スレハ所止シ得タノデハナイカト思ヒマス陸上
 作業上ノ方イ仔細ナ事ハ分リマセ又カ一般的ニ火薬取
 扱ニ対スル觀念ガ乏シカッタト思ヒマス尚火薬類ノ運搬

7

皆非常ニ相漏リマツテ危険ナ火薬ニ對スル注意ト云
フモノハ殆ド拵ツテ居ナイ様ニ見エマシタ
一、別ニ申上ゲル事ハアリマセヌ

80

右録取ス

昭和二十年十月三日

鎮海防備隊機雷爆発事故査問會

書記海軍法務兵曹長

中村文雄

委員海軍法務大尉

三原健

海軍

1370

録取書

鎮海防備隊

海軍二等兵曹

中村孝男

当十九年

右者昭和二十年

十月十四日

鎮海防備隊機雷

爆発事故査問會ニ對シ任意左ノ通陳

述ヲ爲シタリ

一私ノ所属等級及氏名年令ハ只今申上ゲテ通りチアリマス

一只今カラ本月十五日鎮海警備府命令ニ依ル海中投棄作

業ノ火薬運搬状況ヲ機雷爆発事故ニツキ申上ゲマス

一私ノ艇名ハ七一號艇及六八號艇ノ作業ヲ爲十五日(三)頃防

ニ
字
削
除

ヤ

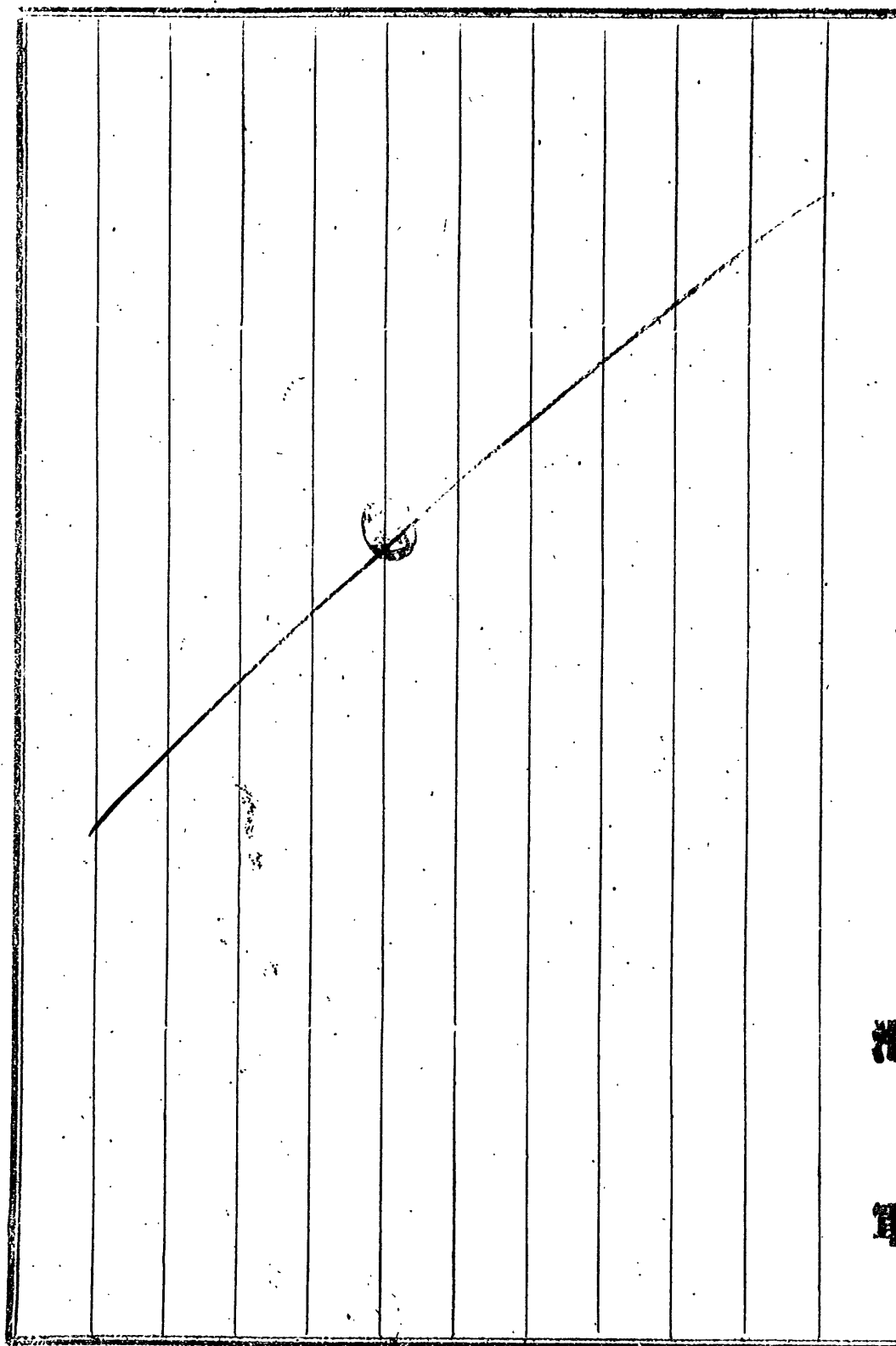
三 字挿入
一 字削除

備隊ホンドヲ発小毛島の二六〇頃着キマシタ。各艇フトニ
黒色小粒火薬(約二〇個)ヲ搭載シテ三〇〇頃小毛島の発
防備隊ホンド六一三三〇頃着キマシタ。各艇ハ作業員約十名
位乗ツテ升マシタ

一ホンドニ着クト同時ニ各艇ハ直チニ火薬ヲ(約二〇個)ヲ陸揚
シ終ツテ小毛島の~~島~~行キマシタ。本艇ハ八〇駆特ニツケテ火薬
陸揚作業ヲヤツテ居~~ル~~ニタ處作業中途ニシテ升マシタ
掃海特務艇ガハルトイフテ松艇ハ右側ニ少々移動スル
特後部ニ後進サセマシタ

一移動後引続キ艇ニ残ツテ居タ火薬ヲ陸揚作業ヲ始メヨウト
思ツテ居リマシタ際ニ陸ニ置イテアツタ火薬が発火ニシタリテ

一 概當ノ爆発ヲ恐レ私ノ艇ハ直ガ後進ヲ退避ニカリホド外ニ少々
 タトキ一大車轉音ト共ニ概當ハ爆発ニミタ、何ニガ原因ヲ発火
 ニタカ知リモ又、尚ホ艇ガ火薬ヲ陸揚スルホソノ場ニ火薬
 ハアリマセ又テレタ
 一 作業員ガ作業スルトキ火薬ニ対スル觀念ガ~~為~~為ニ粗漏ニ
 扱ツテ开ルチケ箱ガコホレテ附近一面ニ火薬粉未ガコホレタモト
 鬼ヒマス
 一 以後ニ於ケル火薬塔戴作業ニツキマレテハ発火ヲ恐レ散ルシテ
 移ンテ居リタリ又作業員ニ就~~テ~~テハ火氣ヲ嚴禁サセヨ
 違ヒ母々様~~准~~マテ居リタリ
 一 他ニ別ニ申述ベルトハアリマセ又



外
庫

1374

アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp/>

91

右録取ス

昭和二十年十月三日

鎮海防備隊機雷爆發事故査問會

書記海軍法務兵曹長

委員海軍法務大尉

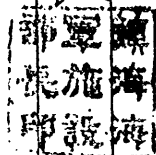
甲村 又 権
三 智 健 三

海軍

1375

昭和二十年十月二十日

鎮海海軍施設部長



鎮海防備隊機雷爆破事故

査問會委員長殿

施設物被害調査ノ件回答

鎮海機雷査問會機密第三号昭會ニ係ル首題件

別紙ノ通りニ有之

追而主用施設トシテハ窓硝子破損程ニシテ損害輕微ナリ

(別紙添)

(終)

22

防備隊内施設被害状況並損害額調書									
名稱	被害状況	金額							
名 稱	被 害 状 況	金	額						
兵 舎	窓硝子、扉大部破損、屋根瓦天升、壁一部破損、莫灯不能窓硝子、扉全部破損、莫灯不能	五	〇、〇〇〇						
兵 庫	側壁破損、屋根破損	一	五、〇〇〇						
隔離病舎 (向武道場)	全壊	三	〇、〇〇〇						
治療室	半壊、丸毛使用不能	四	〇、〇〇〇						
病 室	窓硝子、屋根瓦破損、建物稍傾斜	一	〇、〇〇〇						
烹炊所	窓硝子、屋根瓦破損	五	〇、〇〇〇						
兵員浴室洗面所	窓硝子、屋根瓦破損	三	〇、〇〇〇						
糧 食 庫	屋根瓦及扉類破損	五	〇、〇〇〇						
被 服 庫		三	〇、〇〇〇						
防火要具庫	側壁破損	二	〇、〇〇〇						

隊内受信所	士官浴室	火薬庫(四棟)	鳩舎	軽貨油庫	假防潛網庫	魚雷調整所	金工場	木工場	塗具庫	裝備庫	炊所浴室	練習部(三棟)
窓硝子、扉、屋根瓦破損	窓硝子破損	屋根瓦一部破損	半壊ナル毛使用不能	全壊	全壊	全壊	全壊	全壊	大破	屋根、小屋組、窓、大破	窓硝子、屋根、壁体破損	窓硝子、屋根、壁体破損
三、▽▽▽	一、▽▽▽	四、▽▽▽	一、▽▽▽	一、▽▽▽	一、▽▽▽	一、▽▽▽	三、▽▽▽	二、▽▽▽	四、▽▽▽	五、五、▽▽▽	三、▽▽▽	二、▽▽▽
▽▽▽	▽▽▽	▽▽▽	▽▽▽	▽▽▽	▽▽▽	▽▽▽	▽▽▽	▽▽▽	▽▽▽	▽▽▽	▽▽▽	▽▽▽

1379

昭和二十年十月二十五日

鎮海防備隊被雷爆発事故

査問會委員



同

委員長殿

氣象狀況ニ関スル件報告

本月八日ヨリ十五日迄ノ一週間鎮海ニ於ケル日々ノ氣象狀況ハ別紙ノ通ニ有之

(別紙添)

外

海軍

五	四	三	二	二	一	九	八	月日	十月八日至十月十五日 間氣象狀況 摘要
✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	風向	
								風速	
半晴	晴	晴	晴	曇	雨	曇	半晴	天候	
七六八八	七六六〇	七六三七	七六三〇	七六〇五	七五二〇	七六〇〇	七五八五	氣圧	
一六六	一七〇	一七〇	一七〇	一七五	一七五	一九五	二〇五	温度	
								摘	

26

		鎮海海軍需部	
		一處分スベキ火薬重量	
品名	数量	記事	
八八 爆薬	五〇屯	撤燹炸填スベキモノ	
K五号 二四二五号 乙薬	一五〇屯	工作部ニテ製造簡易兵器ニ使用ノ分	
黒色小粒薬	一八七二屯	”	
K五号 乙薬	五〇屯	”	
釜島 K五号二四二五号乙薬	一〇〇屯		
撤燹 雷	一八二三六五屯		
爆燹 雷	一四九二八屯		
魚雷实用 頭部	二五屯		

計 五七四、一六五 屯

二 其他火工兵器重量

約 六〇〇 屯 各種包装藥彈藥包彈丸類

三 作業ハ十月三日ヨリ着手爆發物總重量一、二〇〇 屯ヲ十五日迄ニ
終了スベク作業ヲ實施セリ

四 事故現場ニ於ケル爆發物運搬狀況

積

(一) 撤留前日隧道ヨリ発生自動車ニテ運搬セシ残片分ナリ
但シ九ニ撤留一部ハ十五日自動車ヲ隧道ヨリ運搬セリ

(二) 八八爆發藥ニ〇屯前日飛鳳里隧道ヨリ発生ナリ

(三) 下五號二四、二五号乙藥大発一隻分約五屯ハ事故当日午後

小毛方面隧道ヨリ運搬陸揚セリ

(終)

録取書

鎮海海軍軍需部

海軍少尉

永吉 邦盛

當三十二年

右者昭和二十年十月五日鎮海防備隊機雷
爆発事故査問會ニ對シ任意左ノ通陳
述ヲ爲シタリ

一私ノ所属等級及氏名等今ハ只今申上ガシタ通リアリマス

一私ハ肩書所属ニ於キマシテハ第一課兵器主任兼兵科需品

現品主任(兵器出納事務)ヲ致シテ居リマス

一只今カラ本月十五日鎮海防備隊内ニ於キマシテ発生シタ機雷

軍

一 字 挿入
ニ 半 削除

爆発事故ニツキ申上げマス

一 鎮海海軍工廠命令ニ依ル 積雷爆薬海中投棄作業ハ十月

三日ヨリ實施サレマシタソノ投棄運搬ニ當ツテ居リマシタ 船艇ハ

たゞ六隻アリマシタ

船ハ十五号十六号掃海特務艇二十三、三十八 駆逐特務艇ガ

一 宍田丸アリマス、船艇ニ積込ミ予報ハ前日一五〇トシ

提出シ尚實際ニ処分セシ 詳報ハ予報ト一續ニ司令部へ一通

船艇ハ出港前迄ニ一通ヲ提出シテ居リマシタ。

一 作業ノ種類ハ小毛島ヨリ大発ニテ一五、二四、二五号之薬ヲ運搬

スル作業トシテ 運道内ヨリトラックニテ九ニ特備ヲ防備隊「ボンド」

ニ運搬スル作業ノ一ニ分ケテアリマシタ。

半挿入
削除

半挿入
削除

一、指揮系統ハ部長(一取)ノ次ニ部員(一取)ソノ下ニ現品主任

(永吉少尉)ト整理主任(末原書記)ガ居リ其ノ下ニ現品係

(現地積込及倉庫)道係ニ大熊兵曹長福田上曹兵曹手

榎原延夫、戸川大川、窪田一雄等ガ居リソノ下ニ各部

ヨリ派遣サレタ作業員ガ居リマス。

一、大体作業ハ十月十五日迄ニ終了スル予定デアリマシタ。然

際ハ十月十日ニ終了致シマシタ。ト云フハ格納場所ノ陸上

火薬庫ヤ、~~道~~道ヤ小毛島釜島等デアリマシタ。爲運

搬ニ容易デアアリマセヌノミナラス作業員ハ毎日交代テ出テ

来ルハテ取扱其ノ他ニ就イテモ大部介ハ不慣ノ者ノミニニテ

作業ハ予定通り進行セズ、火薬ニモ各種ノ後管火管

削除

挿入
削除

爆雷掃雷(火中)小分七五。所ニニ。所ノ物等ノ重
 量物ニシテ此ノ取扱上艦艇ヘ積込モ七数マ容積ノ関係
 意ノ如クナリマセンデシタ。箱入ノ火薬ニモ華ニ十軒ニ五軒
 ニテ八軒等實ニ復雜シ包装不完全ニシテ箱破シ取扱ヒ
 ニモ手間ヲ費シマシタ
 一事故當日ハ大発三隻ニテ小毛島運道格納分ヲ十六日処分
 積込ミノ爲作業ニカリ防備隊ガントニハ大発一隻分ヲ
 陸揚ニテ居リマシタ他ノ艦艇ハ當日処分終了ニテ十五号
 士ヨリ掃海掃務艇ハ既ニ入港ニテ居リマシタ。ニ十五十八駆特ハ
 當日釜島ノ作業ニ従事スベク同所ニ向ヒモ作業更トナリ
 引退シニ十八駆特ノミ入港ニテ居リマシタ。

99

別除

一現場ニ作業員約三十名ヲ引イテ明十六日処分艦艇ニ積込ムベク用意ノ爲福田上巻が準備ヲシテ居リマシタ。其場ニアリマシタ現品ハ前日ヨリ積残シノハハ式爆薬約二〇屯ト今日小毛島ヨリ運搬ミテキタ大発一隻ハ(カールリット)約五屯其ノ他九三九ニ格層約七十個位アリマシタ。一事故発生ニツキ當日私ハ事務室ニ於テソノ急報ヲ接シ馳ケツケマシタ既ニ燃エツアル現状ニテ発火ノ初期ニツイテハ判然ト致レマセンデシタ。

一作業ニ付テハ短期間内ニ終了スベク各自努力致シテ居リマシタモ、軍需部側ノ人員不足ニトモナイ作業員ハ毎日異リ監督不充分ナル上ニ現場ニ於テハ直接軍需部側

一 警戒スルノ外持ニ警戒員モナイ有據デアリマシタ
 ソノ中デモ小毛島ヨリノ火薬運搬ハ順調ニ進ミ居リマシタ
 一 火薬運搬ニツイテハ先ヅ丁寧ニ取扱ヒ火氣ハ煙草ノ火等
 ニ對スル事ヲ嚴禁シテ居リマシタ
 一 事故發生ノ主ナル原因ヲ左ニ上ゲマシバ
 一 連日好天氣ニテ氣温上昇シハハ爆薬ノ可燃性トミ増
 大セシコト
 二 幹部後ノ陣容極ク貧弱ニシテ常ニ現品係下官ヲ
 シテ作業全般ヲ監督スルノ余儀ナキ狀況ニアリシコト
 三 急速整理ノ関係上ハハ爆薬ト檢査トヲ近接シテ位置
 セシメタルコト

4. 作業員ノ火薬ニ対スル認識會弱ナリシコト。

5. 防火要具ノ整備ヲ忘却セシコト

等事故發生ノ原因ハ監督ノ不充分ト各部ヨリノ作業員

ニ対スル認識不徹底ニシテハハ爆薬ト格別トテ注意

ニテ置道イタル矣ニアリト思ヒマス。

ハ別ニ申上ヤルコトハアリマセヌ

原
因

右録取ス

昭和二十年十月五日

鎮海防備隊機雷爆發事故査問會

書記海軍法務支曹長

委員海軍法務大尉

中村文雄

原健

海軍



鎮海敬言備府命令(特)第二五號

昭和二年十月一日

鎮海敬言備府司令長官 山口儀三朗

鎮海敬言備府命令

左ニ依リ速ニ鎮海地区所在各種彈藥火工品爆発物(機雷)處分
用及保安隊保有ノモノ除ク燒却及海中投棄處分ヲ實施ス

(一)

一處分法及地矣

カタクナリト類 カトリックト系火藥類 釜島ニテ燒却

(四) 右以外ノ兄弟島附近水深由一尋以上ノ海中ニ投棄

(別紙)

爆発物処理報告

昭和二十年 月 日

部隊 番号

一、搭載艦艇名

二、發航番號

三、搭載物件

1. 種目 2 数量 3 搭載艦艇名 4 格納位置

104

四、出港豫定日時(實際出港日時)

五、處分方法

1. 海中投棄

2. 焼却

六、處分地点

北緯 度分

東經

度分

七、海中投棄地点、水深(測鉛)

八、処分日時

九、米側立会人氏名

鎮海機雷査問會第一〇號

昭和二十年十月二十八日

鎮海防備隊機雷爆發事故査問會委員長

鎮海海軍工作部長殿

船艇損害額調査方針照會

先般、防備隊機雷爆發事故ニ依リ生ジタル別紙
船艇ノ損害及損害額明細調査、上至急回答
ヲ得度

(別紙添)

(終)

海軍

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

1404

106

別紙	
艇名	被害概況
第一 交通艇 (内火艇)	火災後沈没
第三 交通艇 (内火艇)	前部上甲板附近火破
通船 (五隻)	全壊
カッター (七隻)	全壊
第五 火艇 (掃艇)	機械陸上中 機械埋没
第七 掃艇 (掃艇)	破孔浸水ニヨリ沈没
水源孔 (掃艇)	船橋附近小損
第十 艇 (一六號)	(1) 全艇「レバ」装置使用不能

海

軍

全	五五三號	前部甲板破損通風筒一亡失
全	五五三號	回船室羅針儀 艦橋出入扉及機械室上甲板 上甲板小損通風筒一亡失
全	五五三號	回船室前部燃料タンク室清水タンク室 機械室
全	一一三號	回船室羅針儀等破損後部燃料タンク室破孔
全	一一三號	上甲板直經約十呎の破孔一あり
全	一一〇號	
全	一一九號	(四) 機械室 天蓋 入り込

六三第 一〇二 號

昭和二十年十月三十日

鎮海海軍工作部長

鎮海防備隊機雷爆發事故査問會委員長殿

船艇損害額調査ノ件回答

損害額九記之通

記

船名	損害箇所及程度	損害額
掃特一五	全機ニ亙リ破損変形機械使用不能	六〇〇〇〇
第一三日月丸	艇内甲板及支柱等破損シ后部ヨリ漏水作部	四〇〇〇〇
第三 (内火艇)	前部上甲板附近大破	一四〇〇〇〇
第一 (内火艇)	火炎後沈没	四五〇〇〇
通船五隻	全壊	二〇〇〇〇
カクノ七隻	全壊	五〇〇〇〇

毎頁

第五 (大漢丸 磁掃艇)	機械陸揚中機械埋没	五、三、一、〇、〇
第七 (栄港丸 磁掃艇)	破孔浸水ヨリ沈没	六、〇、〇、〇、〇
水源丸 (磁掃艇)	船橋附近小破	五、〇、〇、〇、〇
軍艇 一一六号	(イ)全機レバー装置使用不能	
一一九号	(ロ)機械室天蓋ヨリ破	
一一〇号		二、五、〇、〇、〇
一一一号		
一一二号	上甲板直経約十耗ノ破孔一アリ	
魚雷艇 五五号	四磁窓羅針儀等破損後部燃料タンク室破孔	
五五号	四磁窓前部燃料タンク室清水タンク室	
五五号	機械室上甲板小破通風筒一七失	五、〇、〇、〇、〇
五五号	四磁窓羅針儀機橋出入扉及機械室上甲板前部甲板破損通風筒一七失	
損害額計金 三、九、三、〇、〇、四		